

聖書箇所：ルカの福音書7章24～35節

説教題：何を見たのですか？

1 洗礼者ヨハネの疑問

洗礼者ヨハネは、当時の権力者であるヘロデ王の罪を厳しく指摘したため、牢獄に投げ込まれました。牢につながれてはいましたが、弟子をとおしてイエスの行動について逐一報告を受けていました。その報告を聞いているうちにヨハネは疑問を抱きます。イエスは本当に旧約聖書が約束している救い主なのだろうか。筋金入りの信仰者であったヨハネが、イエスが救い主なのかどうかわからなくなったと聞けば、彼の信仰になにか大きな問題があったと考えたくなります。

そんなヨハネをイエスはどのように評価されたのでしょうか。28節。「あなたがたに言いますが、女の中から生まれた者の中で、ヨハネよりもすぐれた人は、ひとりもいません。」ヨハネよりもすぐれた信仰者はひとりもないと、手放しのほめようです。

ちょっと意外です。ヨハネは確かにすばらしいことを語り、行ったかもしれない。でも、救い主かどうかわからなくなり、イエスを疑ったのです。フィギュアスケートのように、信仰も点数で評価というのなら、これはかなりの減点の対象になるはずです。ところがイエスの評価はそうではない。まったく逆で、これ以上のないような高い評価です。どうしてなのでしょう。

2 イエスの評価

(1) 疑ってもなにも問題はない

イエスの説明はこうです。26, 27節。「でなかったら、何を見に行つたのですか。預言

者ですか。そのとおり。だが、わたしが言いましょう。預言者よりもすぐれた者をです。その人こそ、『見よ、わたしは使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を、あなたの前に備えさせよう。』と書かれているその人です。」

イエスはマラキ書3章1節のみことばを引きあいだし、マラキ書に書かれている人物こそ洗礼者ヨハネその人なのだ断言しました。だから彼はすぐれている。

イエスはここで二つのことを示しています。一つ目。これは私たちにとって大いに励まされることですが、たとえイエスが救い主であるのかどうかわからなくなっても問題はない。つまり、疑ってもよい。迷ってもよい。誰が本当の救い主であるのかわからない、と口に出して言ってもかまわない。

私たちはどこかでこんなふうにしてきたのではないか。「そんな不信仰な事を口にしてはいけない。イエスを疑うのは、私の信仰が弱いためなのだ。」

でもイエスは言うのです。そんな窮屈なこととはやめようじゃないか。わからなければ、わからないこと言ってどどんわたしにぶつけばよいのです。

まじめな方は、こう言われると戸惑うかもしれません。でも私には思えてならないのです。「あなたのことがわかりません」と、私たちが疑問をぶつけてくることをイエスは待つておられる。イエスは、私たちがこの方を疑うという機会をさえも捉えて、私たちと関係を持ちたいと願っている。イエスはその

ような方なのです。

(2)たとえ自分が何者であるのかわからなくても

26, 27 節でイエスが何を言おうとしたことの二つ目に移ります。

ヨハネは若いときに預言者として活動をスタートし、最期は殉教しました。おそらく最初から死ぬ覚悟はあったはずで、そしてまた、「神が使いを遣わす」とマラキ書にあるのは自分ことだという自覚はあったでしょう。だからヨハネは、イエスを初めて見たとき、確信をもってこう叫びました。「見よ、世の罪を取り除く神の子羊。」イエスこそ救い主であるということに迷いはありません。

ところが、イエスのやること見、語ることを聞いているうちに自信を失っていきます。自分が期待した救い主とあまりにもかけ離れていたからです。この方は本当に救い主なのかと疑いました。そして同時に、自分はいったい何者なのかわからなくなっていました。あのマラキ書に記されている役割を果たすために自分は歩んできたと思っていたはずなのに。あれは思い過ごしだったのだろうか。

私たちも同じようなことを経験します。最初は自信をもって一步を踏み出したのに、大きな挫折を味わってしまうと、自信を失い、自分はいったい何者だったのだろうかと考え込むことがあります。たとえ信仰をもつていても、自分のいのちに大切な意味があるとは思えなくなり、不安でいっぱいになります。

ヨハネは、自分のことがわからなくなり、私たちと同じように悩んだ。イエスはそれに対しどう評価されたか。「女から生まれた者

の中で、ヨハネよりもすぐれた人は、ひとりもいません。」

いやいや、それはヨハネだからそう言われたのであって、一般の私たちは違う。そう言いますか？でも、28 節後半にこうあります。「しかし神の国で一番小さな者でも、彼よりすぐれています。」

ヨハネが特別すぐれているのではないのです。ヨハネでさえ神の国では一番の下っ端に過ぎない。別の言い方をすれば、イエスの目から見れば、私たちはヨハネ以上の存在なのだと言っているのです。

まさかと疑いますか。たしかにこの地上ではそんなふうにはしか見えません。どう考えても、私のいのちになにかの大切な意味があるなんて思われません。神の大切な計画があるとも思えない。しかし神の国においては、がらりと様子が違ってきます。私たちひとりひとりのいのちの尊さが、光のように輝いていく。それは誰の目にも明らかなほどで、小さなものと思われたものこそ、ひときわ輝いていく。それが神の国なのだと言われます。

イエスのことばは私たちを大きく励まします。人々は、自分が何者であるのか知りたくと願っています。しかしなかなかわからない。わかったと思っても、次の瞬間、自信がなくなる。その繰り返しです。

しかしイエスは言います。わからなくても良い。自分のことに自信がなくても良い。なぜなら、あなたを評価するのはあなた自身ではない。神ご自身が評価してくださる。それが驚くほどの高い評価で評価される。だから心配はいらない。自分が何者であるのかわからなくてもよい。あなたは、神の国に招かれている者なのだ。ただ一点このことだけを知っているだけで十分である。イエスはこう

語っています。

3 何を見たのですか？

ここまでイエスがヨハネをどのように評価されたのかを見てきました。次に、では人々はどう評価したのかを見ていきます。ある人たちはヨハネのことばを聞き、自分はきよめられなければならない汚れた者だと自覚し、バプテスマを受けました。そうやって、神こそ正しい方であると告白しました。

一方、そうでない人たちもいました。ヨハネに対し、なんと言ったか。イエスはこう指摘します。「バプテスマのヨハネが来て、パンも食べず、ぶどう酒も飲まずにいて、『あれは悪霊につかわれている』とあなたがたは言う。」

ヨハネに対する非難は、次にイエスにも向けられました。「人の子が来て、食べもし、飲みもすると、『あれ見よ。食いしんぼうの大酒飲み、取税人や罪人の仲間だ』と言うのです。」

食べたなら食べたと言われ、食べなかったら食べないと文句を言う。どこかにいそうなタイプです。何か問題なのでしょう。人々は何を見て文句をつけていますか。食べるか食べないか。飲むのか飲まないのか。目に見える部分です。目に見えることを自分の基準に照らし合わせ、気に入るとか気に入らないとか言っています。でもイエスは何を見なさいと言われたのでしょうか。「あなたがたは、何を見に荒野に出て行ったのですか。風に揺れる葦ですか。でなかったら、何を見に行ったのですか。」

目に見えるものだけが真実であるというのなら、荒野には風に揺れる葦しか見えません。そしてまた、何も食べず飲もうとしない

風変わりな格好をして立っていたヨハネしか見えません。

しかし目に見えるものだけがこの世界のすべてなのでしょう。ヨハネは何を語ったのでしょうか。人の罪です。罪は直接見えるものではありません。見えないから存在しないというのですか。

多くの人たちは自分探しをします。何か目に見えるものを探しているのですか。いいえ、目に見えないけれど大切なものがあると人々は気がついているのです。

私たちはイエスに何を見るのでしょうか。当時、罪人の代表と思われていた取税人とイエスは食事を共にされました。いっしょにぶどう酒を飲まれました。罪人といっしょに食事をしてはならない。それが当時の教えでした。人々の目には、イエスはとんでもない悪いことをしているようにしか見えなかった。目に見えるところだけをあげつらって、その奥にある神の深いみこころを見えませんが、

「人の子は、取税人や罪人の仲間だ。」世の人々はイエスを非難するためにこんなふうに言いました。ところが、このことば、よく見ますとイエスのことを正しく言い当てています。というのは、イエスは罪人の仲間となるために私たちのところに來られたからです。

イエスを非難したつもりで語ったことばが、実は本当のことを語っている。実に皮肉なことですが、神のみこころはイエスを拒む人たちの口をとおして語られていく。それが神の方法なのです。35節。「だが、知恵の正しいことは、そのすべての子供たちが証明します。」

イエスは罪人の仲間となるために來てくださいました。罪人とは誰のことですか。ど

んなひとたちのことを思い浮かべますか。私は何者なのだろうと悩むものです。あなたは本当に救い主なのですかと疑うものです。私は本当に救われているのだろうか。本当に天国には入れるのだろうか、苦しむものです。イエスはそのような人々の仲間となるために来られ、ともに食べ、ともに飲んでくださっている。

そのような救い主のお姿を見失うことがないようにと願わされます。